

第7章 季節の記憶

ふと見上げた空に美しい雲を見つけたとき。自然の中で予想もしなかった風景に出会ったとき。夕暮れに変化していく光が織りなす景色に目を奪われたとき。夏休み、少女たちが遊ぶ姿に、過ぎて行く短い季節を思いながらほんわかと幸せを感じたとき。

そんな、ささやかだけど心が動かされた瞬間を記憶に留めたいと思う。ともすれば通りすぎて忘れてしまいそうなぐらいのわずかな心のひっかかりにも、写真を撮ることでちょっと立ち止まってみる。一枚の写真は記憶にたどり着く手がかりとなって、その時々感動や季節の香りまでも呼び起こしてくれる。

自然、色、光、との出会いを楽しむ

[青い花 青い空]	村山和美
[ふと見た 朝日]	村山和美
[青空と雲の造形]	村山和美
[見上げた空 夕景]	村山和美
[始まりの音]	坂田佳織
[冒険の道]	坂田佳織
[歴史のたくわえ]	坂田佳織
[光のなかに見えたもの]	坂田佳織
[過ぎし日を照らす夕日]	有島康
[無人の駅舎]	有島康

[駅ホームからの夕焼け]
[夕闇に包まれる駅]

有島 康
有島 康

青い花 青い空

「死ぬまでに行きたい！絶景」として話題となったひたち海浜公園。丘一面のネモフィラの青と空の青が広がる青の世界は壮観。



見上げた空 朝日

特別な場所に行かなくても、感動的な瞬間に出会えることがある。家の窓から見えた空も時に驚かされる。



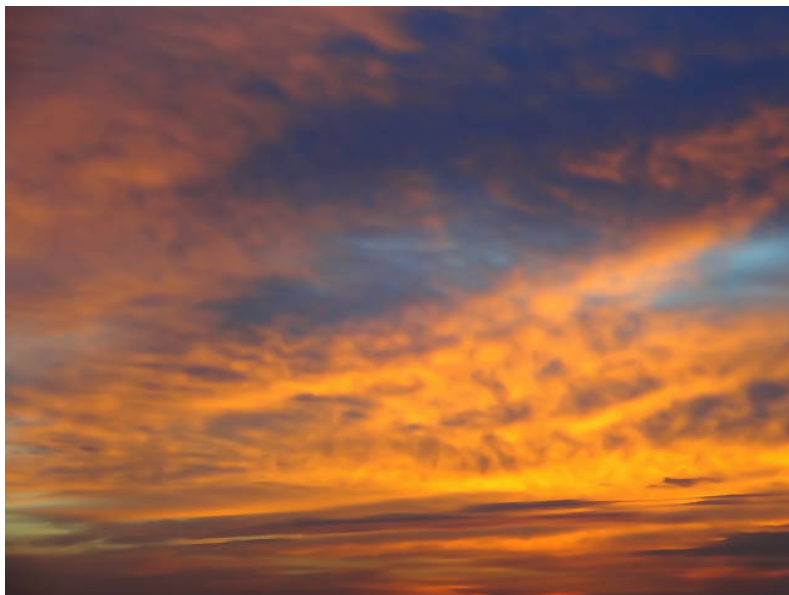
青空と雲の造形

空を流れていく白い雲は次々にその形を変えていき、飽きることはない。



見上げた空 夕景

刻一刻と鮮やかな色を変えていく夕空もまた、空を眺める楽しみを与えてくれる。



始まりの音

ボンッと鈍い音がすると、真っ赤な中身が現れた。夢中で果実を頬張ると、少女たちは種を吹いた。夏の風が種をさらった。



冒険の道

どこまでも続く道。湖の方から吹く風が緑を揺らす。澄み切った空気が体を満たす。夏の太陽にみつめられながら、少女たちは歩いた。



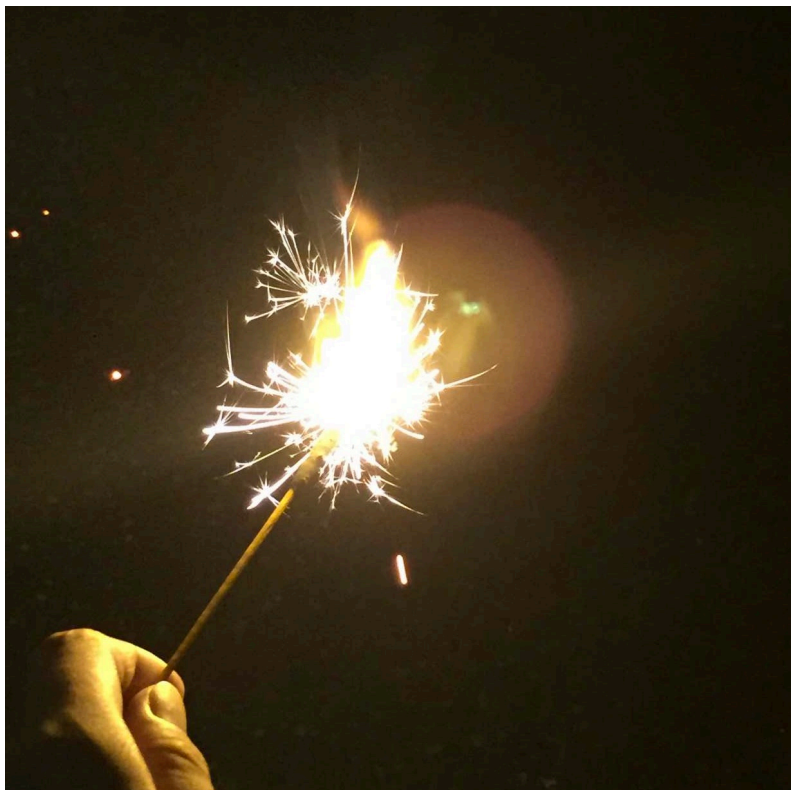
歴史のたくわえ

湖の淵に立つ。自然が積み重ねてきた歴史に思いをはせる。さて、少女はこれからどのような歴史を積み重ねて行くのだろうか。



光のなかに見えたもの

この花火が消えたら夏が終わる。光が少女たちの切なげな横顔を優しく照らす。光のなかに忘れられない夏を映しているのだろうか。



過ぎし日を照らす夕日

秋田県美郷町の奥羽本線飯詰駅の駅前。かつての駅周辺の賑わいを思わせるタクシー会社営業所が、夕日に浮かび上がる。



無人の駅舎

誰もいない駅舎前に帰る人を待つ自転車が一台。暗くなると待合室の蛍光灯があたりを照らした。



駅ホームからの夕焼け

駅舎を抜け階段を登りホームに降りると駅裏の空には夕焼け。一面に広がる田んぼからは初秋の稲穂の濃厚な香りがしてきた。



夕闇に包まれる駅

すっかり夕闇に包まれた小さな駅のホーム。眩しく立ち並ぶ灯りの佇まいに惹かれる。

